糸つむぎ体験

明治中頃まで、西宮市でもここ鳴尾地域においてことに盛んだった「綿花栽培」。

忘れられる文化ではなく歴史ある伝統文化として、その当時の情景に思いを馳せながら綿を手に取って糸つむぎ体験はいかがでしょうか。

西宮神社門前にある、昔ながらのお布団屋

「初一寝具店（はついちしんぐてん）」

私たちの町に「綿花畑（めんかばたけ）」が広がっていた

井原西鶴（いはらさいかく）の著書、【日本永大蔵　巻５「大豆一粒（まめいちりゅう）の光り堂」】にも描かれていますが、江戸時代には綿花（木綿（めんか　もめん））の商（あきな）いで巨万（きょまん）の富を得る者もあったほどに綿（わた）は栽培（さいばい）され取引（とりひき）されていた作物でした。

その綿花、ここ西宮市でも明治中頃（めいじなかごろ）まで栽培（さいばい）されていたことはご存じだったでしょうか？

鳴尾地域においてはことさら盛んだったようです。

西宮市が管理されている市内唯一の綿花畑のお写真データを提供して頂きました。

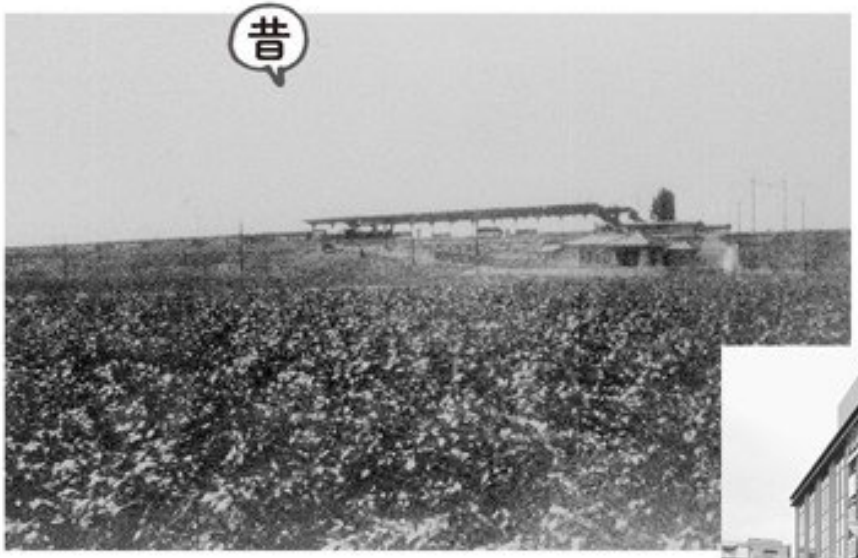
その写真は、昭和９年、JR（当時は省線（しょうせん）と呼ばれていました）甲子園口駅前に広がる一面の綿花畑の風景です。

甲子園口地域へ

明治7年に大阪～神戸間に鉄道が開通した後の昭和9年7月に、地域からの費用全額負担と土地の寄付で新駅が完成。初めて汽車が発着しました。

駅の周囲に広がるのは一面の綿花畑です。当時、日本の近代工業発展の原動力ともいえる紡績工場が西宮にもありました。

現在も住民が駅を大切に思う気持ちは変わらず、季節の花が駅前に咲き誇ります。

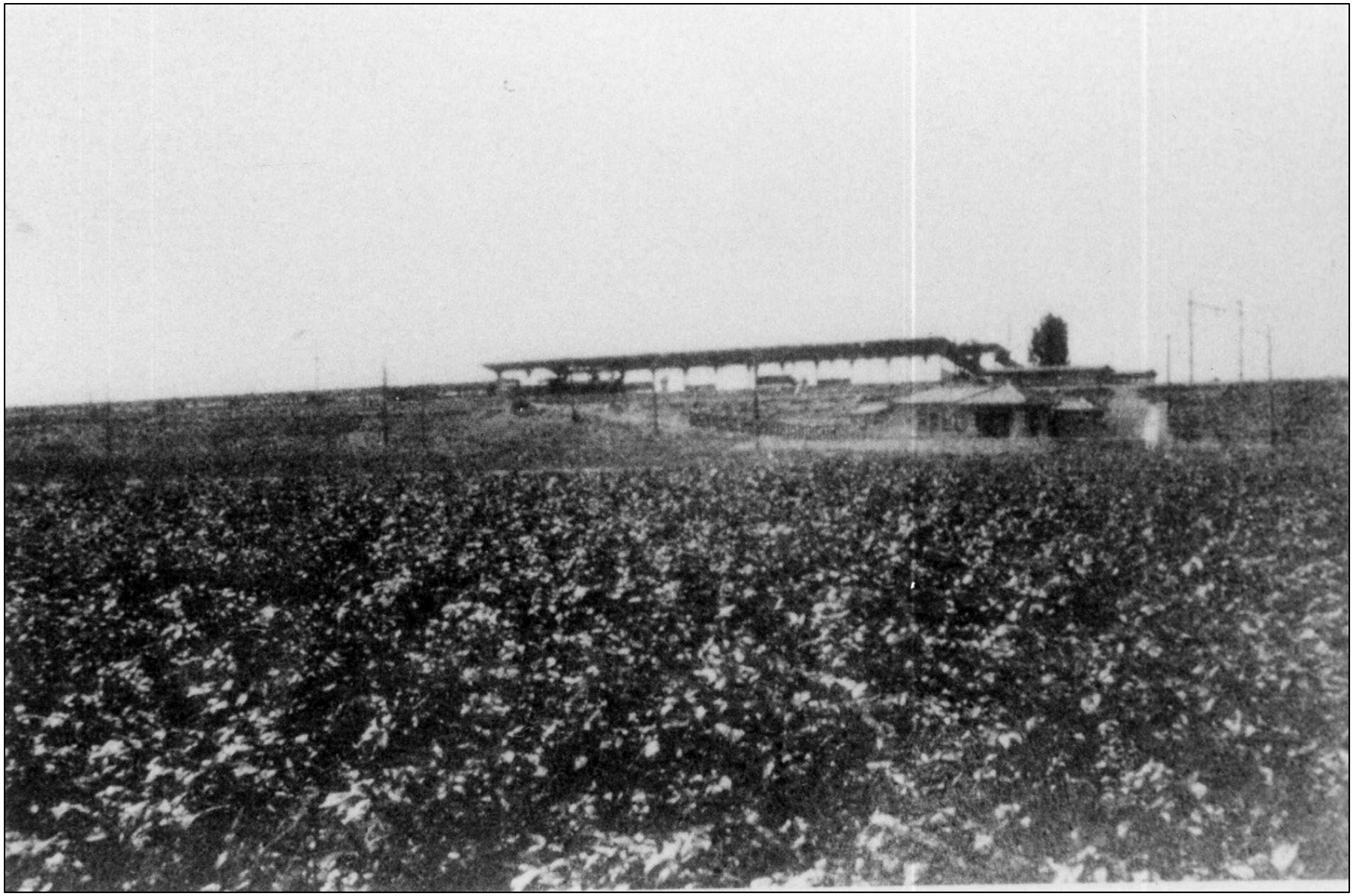


綿花畑が広がる駅前の風景（上）ときれいになった甲子園口駅

写真左：執行孝雄氏提供

地域情報誌『宮っ子』2021 年 3・4 月号（No.366）写真でつづる西宮の歴史・風景より

拡大写真



『西宮市提供』甲子園口駅開設前(S9.6)執行孝胤氏　写真

冒頭(ぼうとう)で鳴尾地域での綿花栽培は明治中頃までと触(ふ)れましたが、甲子園口付近では昭和に入っても綿花栽培が行われていたことが分かります。

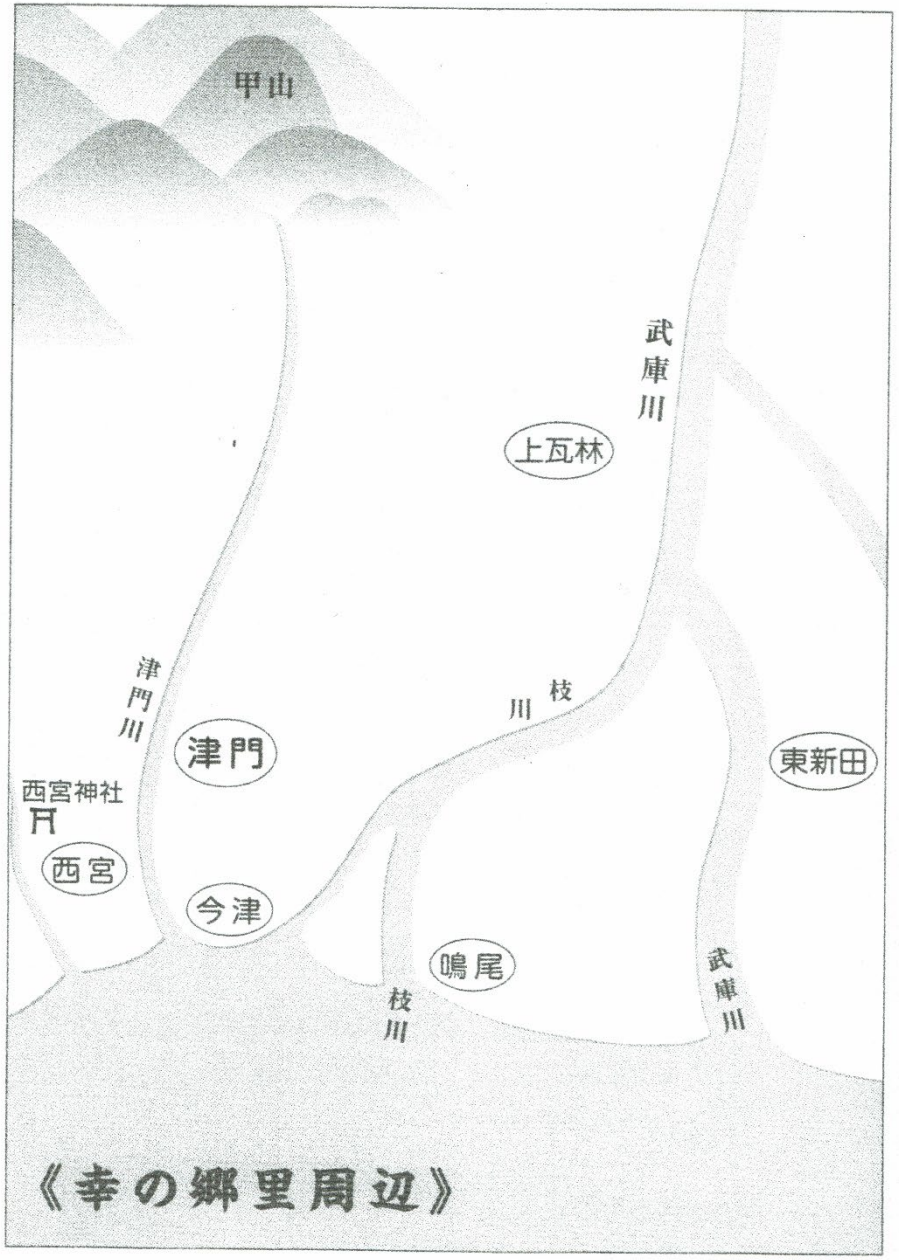
しかし、日本の綿花栽培は低い関税(かんぜい)のかかった輸入綿(ゆにゅうめん)に押され減少(げんしょう)していたところに、１８９６年（明治２９年）の綿花輸入税完全撤廃(めんかゆにゅうぜいかんぜんてっぱい)を機(き)に、国内綿花栽培の減少がさらに進むこととなりました。

その為、鳴尾地域においては代替え作物(だいかえさくもつ)として、西瓜(すいか)や苺(いちご)が栽培されるようになっていきました。

そして、砂地(すなち)でも栽培でき、且(か)つ台風シーズンを避(さ)けて栽培ができた苺が「鳴尾苺」として名(な)を馳(は)せるようになりました。

現在ではその「鳴尾苺」でさえ遠い記憶となってきています。

西宮神社門前にある、昔ながらのお布団屋「初一寝具店(はついちしんぐてん)」



地図・河合理佳

故郷(ふるさと)の歴史(れきし)を知り、当時の情景(じょうけい)を思い起こす手がかりとして宝塚市(たからづかし)生まれで時代小説家(しょうせつか)の著作(ちょさく)から一節(いっせつ)を紹介(しょうかい)させて頂こうと思います。

「あきない世傳(せいでん)　金と銀　」

(源流編)

高田 郁　作

映画・ドラマ化された

『みをつくし料理帖』で有名な時代小説家

摂津国、武庫郡津門村の娘「幸」（七歳）が兄「雅由」（一七歳）と七夕飾りを川へ流しに行った美しい夕暮れ時、

見せたいものがあると言う兄に連れられて枝川の西岸の櫓に上り、遠くの武庫川を望んで（現在の鳴尾地域）の下り…

以下本文

辺りの黄金色は徐々に暗さを増していき、目を凝らせば、淡く霞む川向うに、仄々と無数の粒が浮かび上がる。一斉に小さな灯を点したような景色に、幸は傍らの兄を見上げた。

「兄さん、あの小さく光るのは？」

ああ、あれは、と、雅由は目を細めて灯の正体を確かめる。

「あれは綿の花だ」

綿の花、と聞き、合点がいって幸は頷いた。

津門でも綿作は盛んで、その花が一日限りの儚い命であることも幸は知っていた。
咲き始めは黄白で、萎れる頃、薄紅色へと色を変える不思議な花だ。
武庫川は豪雨ともなれば幾度となく氾濫し、田畑や牛馬、そして人命をいとも簡単に呑み込んでしまう恐ろしい「暴れ川」だった。
しかし同時に、この地に暮らす者に富をもたらす「宝の川」でもあった。即ち、土砂を運び堆積させ、作物を育てる地面を広げてくれる。
殊に砂地は綿作に向き、一帯では綿の収穫が米を始め他の作物の収穫を凌ぐ勢いだった。
綿作の利点は、単に豪農を生むばかりではない。綿のみを摘み、乾かして種を取り、解して糸を紡ぎ、機で布に織る。
そうやって沢山のひとの手が必要だから、土地持ちとは無縁の者にとっても仕事になるし、糧を得ることが出来るのだ。
天の恩恵とひとびとの暮らしとが、この金と銀の情景の中に溶け込むのを、幼いながら幸は深く胸に刻んだ。　つづく